

特集

温故知新

～『知恩』とともに、今を生きる (特別編⑦)

過去の先達のことばに学ぶ



昭和24（1949）年に創刊の『知恩』誌は、幾多の先人たちが珠玉のことばを残していくまです。前回（2025年7月号と9月号）は大正、昭和を代表する作家のひとりであつた詩人の佐藤春夫（1892～1964年）の寄稿や講演に焦点を当てました。今回は60年前の昭和41（1966）年の『知恩』誌を飾つた僧侶で作家の寺内大吉師（1921～2008年）の講演に触れましょう。

● 16歳の長男の死に直面し、考えさせられたこと

寺内大吉師は浄土宗のお寺に生まれ、終戦の年に大学を卒業、住職の傍ら作家活動に入った直木賞作家で、ペンネームは自坊の大吉寺に由来します。初期には競輪などスポーツ分野での評論のほか、ベレー帽をかぶつた気軽な姿でテレビにも登場し、昭和のお茶の間で親しまれた人でした。後年は本名である成田有恒師（なりたゆうこう）として、20世紀最後の浄土宗宗務総長（1991～2001年）として尽力し、さらには大本山増上寺の第87代法主（2001～2008年）を務め、浄土宗の発展に寄与しました。

『知恩』誌へは1965年の御忌大会法要の際の記念講演に登壇し、翌年の5月号から3ヶ月間、講演詳報が載りました。タイトルは「レジマーとしての宗教」。当時も今もかなり軽い感じのする演題ですが、軽いタイトルとは裏腹に深刻な話から始まりました。話します。「私は皆さまに心から感謝の誠を捧げたい」と切り出した寺内大吉師は、子どもが3人いるに突然、この子が亡くなり……（中略）……、今日がその子の三七日に該当するのであります」